

**ICT機器を活用した効果的な指導について**  
 ～コミュニケーションの力を高めるためのタブレット型端末・電子黒板の活用を通して～

広島県特別支援学校教育研究会第3研究グループ

**1 はじめに**

〈昨年度〉

児童生徒の生活の質を高めることや主体的な学びを深める方法としてICT機器の使用が有効であることが分かった。



操作の難しさや関わり方の少なさに課題があった。



〈今年度〉



コミュニケーション及び主体的な学びにおけるICT機器の効果的な活用方法について研究をしよう！

**2 研究仮説**

他者とのコミュニケーションの取りにくい児童生徒が、ICT機器を活用することで、コミュニケーションの力が向上するだろう。

**3 研究内容・研究方法**

所属する学部及び地域による班分けを行い、各校で仮説検証の取組を行った。

**4 研究の成果と課題**

	児童生徒の実態（課題）	取組	変容（成果）	課題
1班 中学部	表出手段が限られているため伝わらないこともあり、あきらめや妥協した様子が見られる。注意獲得行動による関わりが多い。	意思疎通の手段としてデジタルカメラを使用する。また、発表場面ではタブレット型端末（トーキングエイド）で発声する。	情報の共有ができ、「～ではなく…だ」の意思表示ができた。自分で発表しようとする意識が向上し、注意獲得行動が減少した。	どの程度の枚数を記録しておくか、検討が必要である。友だちから評価を受けるには音声に加え、視覚情報が必要である。
2班 中学部	自分の思いはあるが、自分の意見を友だちに上手く伝えることができず、お互いの考えが行き違いになる。	学習場面で、タブレット型端末（ロイロノート）、プロジェクターを用い、互いの考えや答えを共有する。	互いの考えを共有することで意欲が高まり、やりとりが増え、自分たちで主体的に相談しながら学習課題を解決できた。	生徒自身が疑問に感じたり、友だちと解決に向けて取り組んだりする課題設定の必要がある。
3班 小学部	伝えたい気持ちは強いが、言葉で表現して相手に要求をすることが難しい。	タブレット型端末（かなトーク）を使用して、教師（担任）に要求する。	担任以外にも要求できた。伝えたいことの広がりが見られ、問いかけに答えたり、要求を断られても別の選択をしたりすることができた。	細かい要求にはまだ対応できなかった。要求の発信のみに留まってしまった。

**5 まとめ**

コミュニケーションの取りにくい児童生徒の、各々のつまずきの原因に対し、ICT機器を活用し、情報の「視覚化」「入力」「処理」「出力」の指導・支援を行った。その結果「教師への依存の減少」「他者に対する主体的な働きかけの増加」「他者へ伝えたいという意欲の向上」等の変容が見られた。このことからICT機器が『コミュニケーション力の向上』に有効であることが検証できた。

**6 今後に向けて（ICTの将来と課題）**

将来的には、校内の学習場面での活用に限らず、家庭での学習、生活支援機器としての活用に広げ、児童生徒の自立や社会参画へ繋げていきたい。

活用用途の拡大や児童生徒の主体的なICT機器の活用を目指していくに当たっては、認知の段階や活用の範囲に合わせた「使用におけるルールや情報モラルの指導」を合わせて研究していくことが必要である。また、学校の体制づくりや教師の情報活用能力の向上が喫緊の課題である。